

イワクラフォーラム 2006

主催 イワクラ(磐座)学会

開催日 平成18年 10月7日 (土曜日)

午後2時～5時 (受付 午後1時)

会場 アピオ大阪 小ホール

タイムテーブル

13時20分

受付開始

入場開始

開演

13時55分 開演予鈴
14時0分 開演挨拶

会長挨拶 鈴木 旭
渡辺豊和

14時10分 須田郡司氏講演

15時 5分 休憩

15時10分 鎌田東二氏講演

16時 5分 休憩

16時10分 千田稔氏講演

17時 5分 閉会の挨拶

17時10分 終演 平石知良

講演

1. 「石に呼ばれて〜日本石巡礼」

写真家

須田郡司

世界の聖地を巡り石の魅力と出会う。石をきっかけとして何かを感じてほしいと思い、全国各地の石、それに関わる人々との出会いを伝えるために日本石巡礼を三年前にスタート。この石巡礼で出会った様々な個性的な石達の写真を旅のエピソードを交えて紹介致します。石には、日本と世界をつなぐ見えない力が働いているように感じています。

2. 「石の神話とコスモロジー」

宗教哲学者

京都造形芸術大学教授
鎌田東二

奈良県桜井市に鎮座する大神神社は、神奈備山である三輪山を御神体として仰ぎ、奥津磐座・中津磐座・辺津磐座の三つの磐座群がある。この地に鎮座する「大物主

神」は、これらの磐座とどのような関係を持つのか。また、石上神宮に祀られているニヒハヤヒノミ

コトは、天の磐船に乗って天より飛来したと『日本書紀』は伝える。この「天磐船」とはいったい何であらうか。日本神話と神社に伝わるいくつかの石の伝承を通して、石が持つ宇宙の声を聴き取ってみたい。アイルランドのアラン島で出会った石笛も吹いてみたい。

3. 「古代日本における石に対する宗教的心性」
歴史・地理学者

国際日本文化センター 教授
千田 稔

『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』における石に関する記述をとりあげ、人々が石のどのような存在に対して宗教的な心性をもったかについて、さらに石はなぜ人々の宗教性を喚起するのかについて考える。



フォーラムドキュメント

2006年10月、前日の雨も上がり薄日の指す天候となった。12時30分、フォーラムを手伝っていた多く会員の皆さんが集合、役割の確認や受付テーブルの配置、書籍販売ゾーンの用意、機器の接続準備とそれぞれの役割を淡々とこなしていく。

14時の開演にもかかわらず熱心な参加者は13時には見え始め、準備と受付開始が重なりやや混乱した。その後は、お手伝いいただいたスタッフのおかげで受付はスムーズに行われた。

14時には、参加予定者のほとんどが入場し客席はほぼ満席の状況になった。当初参加人員の申込みが少なく会場ががららの状態になるのではと心配したが、幸いそれなりの入場者があって喜んでいる。総入場者数150名強であった。

14時、鈴木旭副会長の開会の挨拶と司会によりフォーラムが開演された。渡辺豊和会長挨拶に引き続き須田郡司氏のスライドによる「石に呼ばれて〜日本石巡礼」が始まった。薄暗くなった会場に澄んだ音色の音楽が流れ全国の巨石が画面いっぱいにくつも映し出される。そのあとタイトルが現れ須田氏のスライドと話が始まった。全国の巨石を網羅したスライドは圧巻で、巨石に興味を持つ会員は熱心に耳を傾けていた。

次いで鎌田東二氏による「石の神話とコスモロジー」である。いきなりほら貝を打ち鳴らし、また石笛の演奏で講演が始まった。

アイルランドでの石笛との出会い、石の言霊、音霊として、石は『語る』と言う思い。

天岩戸は、胎内もしくは子宮を象徴しているのではないか。あるいは死と再生の変容空間を象徴。あの世とこの世を分ける境としてまた、それらをつなぐチャンネルとしての意味があったことなど、天岩戸についての氏の見解が述べ

られた。

続いて、沖ノ島のイワクラ祭祀に触れ、4世紀から10世紀に至る祭祀の変遷について述べられた。それによると、祭祀は、岩上祭祀から岩陰祭祀に移り、次いで露天祭祀になり、それが常設の社殿と変化していった。このイワクラ、磐境祭祀から現在の社殿祭祀に至る変遷はいかなる社会形態・思想の変化によるものかを考えさせる。そのとき変遷の原風景としての沖ノ島、宗像大社等の巨石信仰が重要な意味合いを持っていると述べられた。

大神神社と大物主伝承では、三輪山は神奈備山であり、佇まい、山容が整っており、大和三山とあいまって大和の重要な位置を占めていると述べる。延喜式内社は全国で3, 132座あり、そのうち大和に286座。大神、大物主といった大・大とつく神社名は他に存在しない。このことから大神神社はそれほど重要視されていたのだということが神社名からわかる。

天河大弁財天社とイワクラでは、

弁財天社の建て替えのときにその下から巨大なイワクラが発見された。そのイワクラに穴があり、それが地下の天の川に繋がっており、天の天の川と地上の天の川とを繋いでいると言われている。いわば大宇宙と小宇宙が対応しているといわれている。天河宮司が神社は宇宙船、宇宙ステーションと語りき。

天のイワクラ、磐船、磐の楠舟など、これらは神霊の移動を表現、あるいは先祖の移動と読める。聖地・霊場の特性とは、簡単に言えば魂を飛ばす場所魂をつなぐ場所、魂を浄化する場所である。宇宙的調和、神話的時間を感じ取るところである。

その様な場所に古代祭祀があり、現在の聖地が形作られている。次いで国内外の巨石や洞窟など神秘的な空間について述べ講演は終了した。

5分間の休憩を挟んで、千田稔氏による『古代日本における石に対する宗教的心性』の講演が始まった。鎌田氏とは打って変わった

静かな口調でその講演は始まった。講演は前半と後半に分け、前半は万葉集を取り上げ、後半は飛鳥と石上神宮の石の問題を取り上げるとのことである。

まず、万葉集の神にかかる枕詞である「ちはやぶる」は千の磐を破ると書いて、ちはやぶると詠み、千の岩を破るよりも神の力は偉大であるということ古代の人は感じたのであろう。

次いで、常磐という言葉から、永遠、普遍である磐と、はかない人間の命を対比し、磐に対する憧れが感じられるという。

また、「ゆつ岩群(いわむら)」と言う言葉から、霊力のある岩の群に草が生えないように永遠の女性であつて欲しいという女性への願望が、岩という普遍のものを通して願っているのではないか。

そのほか「神さぶる岩根」や「岩置かしこき山」などの万葉集の言葉もすべて古代の人の岩に対する憧れ畏敬の念が表れていると述べ、これらが古代の人の岩に対する宗教的心性ではないかと前半の話を

締めくくられた。

後半は、斎明天皇の「狂心の渠(たぶれこころのみぞ)」の話から始まった。

酒船石周辺からみつかった石垣は、斎明天皇の運河の跡であろうといわれている。また「亀形石造物」が発見された。その形状から並みの祭祀場ではなく天皇の重要な儀式に使われたものではないかと想像している。そこに使われている石は「天理砂岩」であり、斎明天皇が作ったといわれる「運河」で天理の石上町から運ばれたと思われる。なぜ、この地から石を運ばせたかと考えるに、この地の東方に大国見山という巨石信仰の山があり、その巨石信仰圏にある石の上から飛鳥の石材を運ばせたのではと言う見解を述べられ、飛鳥の石造物とイワクラ信仰のつながりを述べられた。

以上3時間に渡る3人の講演が終了した。聴衆は熱心にそして多くの感動に包まれてイワクラ(磐座)学会のフォーラムは盛会のうちを終了した。

了